



文明化：貴族とブルジョワ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沢田, 善太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004735

文 明 化

——貴族とブルジョワ——

沢 田 善 太 郎

はじめに

ガルガンチュワが修道士ジャン・デ・ザントムールに寄進したテレームの僧院は、キリスト教修道院を裏返しにした世界である。世の修道院は俗人の立ち入りを禁ずる。それゆえ、テレームの僧院では、僧侶や尼僧が迷いこむと、かれらの通った場所を丹念にはらいきよめる。当今の修道院にはいるのはたいてい「身体に障害をもつひとびと」である。それゆえ、この僧院にはいるのは眉目麗しく気だてのよい若い男女である。清貧、貞潔、従順が修道院のモットーである。それゆえ、ここでは才知、学芸、武芸に秀でた血筋正しい男女が、侍女にかしづかれ、流行の優雅な衣装と宝石とを身につけ、ひろびろとした遊戯場であそびたわむれる。

多くの初期人文主義者と同様、ラブレーもまたノミとシラミになやまされる修道院と学寮の世界から宮廷社会をめざす脱出願望者である。この願望がなかったとしても、かれらは真の宮廷生活者ではない。かれらはその一時的滞留者、ときには君侯の助言者だが、ときには道化師同然の存在である。テレームの僧院はこのようなかれらからみた理想の宮廷社会である。

テレームの僧院はみたところ反規律のユートピアである。時計と鐘の音で律せられる修道院生活とことなり、このひろい僧院には一個の時計もなく、ひと

びとは自由な時間に寝起きする。存在する戒律はひとつ、「欲することをなせ」である。しかし、血筋が貴く、教養にみちた任人たちにはおのずから調和が生じるものであるらしい。だれかが「飲みましょう」といえばみなが飲んだ。「あそびましょう」といえばみながあそんだ。野遊びにいきましょうといえればみなが出かけた。かれらの「自由な」心情のなかには社交性と他人も自己も傷つけないようにふるまう洗練されたコンフォーミズムとが内面化されているようである。

『監獄の誕生』から『性の歴史』にいたるフーコーの著作は、近代社会を規律化社会としてとらえる視点を定着させつつある。ウェーバーの「合理化」論、エリアスの「文明化」論など関連する諸概念を再検討する動きもさかんである。たとえば、オーネイルはウェーバーとフーコーの規律化論を比較する。⁽¹⁾ ヴァン・クリーカンの1990年の論文のひとつは、ウェーバー、フーコー、エストライヒを論じ、もうひとつはフーコーとエリアスを論じる。⁽²⁾ ペンバートンはフーコーとギデンスをとりあげる。⁽³⁾ ゴルスキは、独立戦争当時のオランダと17世紀のブランデンブルグ=プロイセンにおける「規律化革命」の分析を通じて、フーコー、エリアス、ウェーバーの視点を検討する。⁽⁴⁾

-
- (1) O'Neill, John, 1986, "The Disciplinary Society: From Weber to Foucault", *The British Journal of Sociology*, 37, 1, Mar, pp.42-60.
- (2) Van Krieken, Robert, 1990, "Social Discipline and State Formation: Weber and Oestreich on the Historical Sociology of Subjectivity", *Amsterdams Sociologisch Tijdschrift*, 17, 1, May, pp.3-28. —, 1990, "The Organization of the Soul: Elias and Foucault on Discipline and the Self", *Archives Europeennes de Sociologie*, 31, 2, pp.353-371.
- (3) Pemberton, Alec, 1990, "Discipline and Pacification in the Modern Administrative State: The Case of Social Welfare Fraud", *Journal of Sociology and Social Welfare*, 17, 2, June, pp.125-142.
- (4) Gorski Philip S., 1993, "The Protestant Ethic Revisited: Disciplinary Revolution and State Formation in Holland and Prussia", *American Journal of Sociology*, 99-2, pp.265-316.

ノルベルト・エリアスはこのような比較研究でもっとも注目されている論者のひとりである。フーコーにおける監獄、ウェーバーにおける修道院のように、規律化社会は全制的施設をメタファーとして語られることが多い。エリアスは「国民のなかで礼儀作法が細かい法律のかわりをする」ようになる文明化の過程を⁽⁵⁾ 宮廷社会を起点にして論じ、規律化のメタファーを転換した。文明化と規律化は異質な概念ではない。文明化が感情の露出の抑制、上品な物腰・服装・言葉づかいや清潔の規範をひとつひとつに課するものである以上、両者はいずれも「身体の従順化」を促進する近代の知と権力の構造的所産である。

全制的施設から宮廷へのメタファーの転換はつぎのふたつの意義をもつ。第一に、それは規律を強要される個人が自発的に規律を演じるようになる、という、規律化社会における「主体」と「客体」の逆転の過程を分析するうえであらたな視点を提供する。第二に、それは規律化が近代の社会階級の形成におよぼした影響をとらえるうえでもあらたな視点を提供する。

第一の視点の説明。ウェーバーによれば、規律とは社会集団の成員が支配者やその行政幹部の命令に敏速・自動的・機械的に服従することである。⁽⁶⁾ フーコーはこのような従順性を訓練するために近代社会がつくりあげた諸技術を論じた。『監獄の誕生』でのヒエラルキー的監視、規格化をおこなう制裁、試験、『性の歴史』第1巻での告白の制度化は、いずれもこの意味での身体の規律化をめざす「権力の技術論」であった。

とはいえ、規律化社会の支配に服従する個人はたんに権力の「客体」ではな

(5) 本稿でとりあげるエリアスの著作はつぎの2つである。赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳、『文明化の過程—ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』法政大学出版局 (Elias, 1939)/波田節夫、中埜芳之、吉田正勝訳、『宮廷社会』法政大学出版局 (Elias, 1969)。

(6) ウェーバー、清水幾太郎訳『社会学の根本概念』、岩波書店、p. 86。なお、ウェーバーとフーコーの規律論については、沢田善太郎、1986、「近代組織規律の構造」『人間科学論集』第18号を参照のこと。

い。規律がもたらす社会的権威への服従が「節度」とみなされたり、「公共精神」とみなされるようになると、規律の社会的意味が変化する。規律は個人が監禁状況において強いられる服従ではなく、かれが公共空間において誇示する徳(virtu)に変化する。ひとびとは、紳士・勤勉な市民・温厚な臣民など、それぞれの社会が期待する規律役割を取得することによって、みずから規律化を推進する「主体」に転じる。

ドゥルーズは現代社会が規律社会から管理社会に移行したという⁽⁷⁾。管理社会の秩序は規律=監禁のイメージが喚起する静的秩序ではなく、たえず流転する「変動相場制」の秩序である。この社会で管理される個人は、社会秩序の変動を敏感にキャッチすることによって、そのときどきの秩序に同調する——ある意味では要領のよい個人である。このような個人が作りだされる歴史的過程を、近代初期の宮廷にまでさかのぼって論じたのがエリアスの仕事ではなかったか。

第二の視点の説明。上流階級に視野を限定したエリアスの研究は文明化が市民社会と民衆社会におよぼした影響の研究に拡張できる。近代官僚制の起源は絶対主義の時代の宮廷に出現した家産官僚制である。そこで活動する統治エリートの多くは宮廷規範を学ぶことによって文明化した元市民である。近代初期の社会的規律化を推進したかれらは文明の伝道者として民衆世界に対峙する。

近代初期、宮廷は富・権力・威信の中心である。ひとびとは一面では宮廷文化を憧憬の念から模倣する。しかし、ミュシャンブレッドによると、それ以上に重要なことは、社会の諸集団が、宮廷社会の提供する模範に同化する程度に⁽⁸⁾応じて「差異化」されることである。民衆の伝統的習俗の多くは文明の規範に

(7) ジル・ドゥルーズ、宮林寛訳『記号と事件—1972-1990年の対話』河出書房新社(Deleuze, 1990)。

(8) ロベール・ミュシャンブレッド、石井洋二郎訳『近代人の誕生—フランス民衆社会と習俗の文明化』筑摩書房(Muchembled, 1988)。

合致しないがゆえに「有罪化 (criminalizer)」される。貴族は市民を嘲笑し、市民は農民を侮蔑する。後のない農民は乞食をいじめるか、魔女をさがしだして火刑にすることぐらいしか、自己の尊厳を確認する手だてではない。この意味で、文明化の過程は諸階級の対立を習俗の世界にうつします。

本稿の前半では第一の視点からエリアスの議論に筆者の気づいたいくつかの論点を追加し、文明化が宮廷人の心的相互作用におよぼした影響を概観する。後半では文明化のにない手が貴族からブルジョワに交代した17世紀末から18世紀の時期に注目する。そこでは文明化のにない手の交代がもつ歴史的意味をしめすために、モーリス・アギュロンにならって、貴族のソシアビリテとブルジョワのソシアビリテを類型化する⁽⁹⁾。この意味で、本稿の後半は宮廷社会の文明化を論じたエリアスと民衆社会におけるそれを論じたミュシャンプレッドとの中間に位置する研究である。

1 「文明化」小史

中世の宮廷作法

エリアスによると、宮廷社会は大封建領主がそれぞれの宮廷をいとなむようになった「12世紀ルネッサンス」の時期に誕生する。それは国王の従士が封土を世襲化し、封建制を確立しつつある時期、古代の崩壊ののち衰微したヨーロッパの人口がようやく本格的な増加をみて開拓と十字軍植民運動の気運がもりあがった時期、都市・商業・内陸交通の復活期、騎士道の規範と儀礼が成立し

(9) Agulhon, Maurice, 1968, *Pénitents et Francs-Maçons de l'ancienne Provence: Essai sur la sociabilité meridionale*, Paris; Fayard. ソシアビリテとは、種々の社会集団を特徴的づける対人関係の様式である。くわしくは、沢田善太郎, 1989, 「セルクル—九世紀のアソシエーション」, 『大阪府立大学紀要』 37, pp. 81-100. を参照のこと。

た時期、ローマ法の継受にともない、中世の大学が法律家というあたらしい職業集団をつくりだすようになった時期である。

この時期、小領主は時代にとりのこされ、あいかわらず「追いはぎ同然」の生活をおくっている⁽¹⁰⁾。しかし、大領主（君侯）は収入・支出とも規模が増大した。かれらの支配する領土は征服、婚姻、相続、その他さまざまな理由でひろがる。気前のよさが主人の証であるこの時代、領内に商業のさかんな都市をえた君侯は税金や借金でかきあつめた収入をたちまち散財する。下級貴族は君侯の宮廷に伺候し庇護をもとめる。かれらには戦場での武勲と宮廷での礼節という騎士道のふたつの役割期待があたえられる。ふだんは自分のせまい領地で生活する戦士貴族のほかに、平時にも宮廷で奉仕する宮廷貴族があらわれる。その一方で、君侯はその領土の経営のために聖職者と法律家をやとう。吟遊詩人・楽師・工芸職人・道化師・学者・矮人、等々も、日々の糧を宮廷にもとめて旅をする。宮廷は文芸復興の潜在的拠点となる。

騎士道恋愛歌を現実そのものとみるのと同様、それをまったくの虚構とみるのもあやまりのようである。12世紀末のシャンパーニュ伯夫人・摂政マリーに仕えた宮廷礼拝堂つき司祭アンドレアス・カペラヌスのあらわした『恋の技術 (De Arte honeste amandi)』は、中産階級に属する男・低位の貴族階級に属する男・高位の貴族階級に属する男が中産階級に属する女・低位の貴族階級に属する女・高位の貴族階級に属する女をくどくとき、考えられる9通りの組みあわせのうち8通りについて、その心得を伝授する⁽¹¹⁾。みずからの「秀でた人格」を話題と話法によって表出すること、相互の身分関係を意識した会話を操作することは恋の目的成就のための計算された技術のようである。12世紀の

(10) アシル・リュシェール、福本直之訳「フランス中世の社会—フィリップ・オーギュストの時代」東京書籍、p.305. (Luchoire, 1909).

(11) カペラヌス、野島秀勝訳「宮廷風恋愛の技術」法政大学出版局 (Capellanus, 11--).

「恋の技術」はエリアスのいう「宮廷合理性」の萌芽である。

とはいえ、12世紀にあっては、平和が内乱や十字軍戦争のあいまに生じるつかのまの休息であるのと同様、宮廷礼節もまた中世の荒々しい心性をおおう薄い外皮である。国王が王妃の顔面を拳骨でなぐることはめずらしくなかった。有力貴族もまた激高すると、王妃を「ずべた、女郎」とののしった。⁽¹²⁾

この事情は14～15世紀のもっともはなやかな宮廷のひとつであったブルゴーニュ侯家の宮廷においてもさほどかわらない。たしかに見せものがかったおおげさな礼法はいたるところにみられた。ホイジンガによると、15世紀の宮廷生活で礼儀争いが異常に発達した。

「教会もうでは、まるでメヌエットを踊るようなぐあいであった。教会を出るときにも、もんちゃくがおきたし、帰り道では、より上位のものを右側に歩かせようといさかい、狭い木橋にさしかかればさしかかったで、道が小路にはいればはいたで、だれが先に行くべきかのゆずりあいのはじまった。家につけばついで、その家の主人は、なかにはいっていっぱい飲んでいくようにと、連れの人たちを誘わなければならぬ。連れの人たちは、なんとかかんとか口実をさがして、それをいんぎんにことわらなければならぬ。次には、主人側が、かれらを途中まで送っていくことになっていた、作法通りの抵抗を押しきって」⁽¹³⁾

結局は位階において最上位の人間が先頭をきるわけだが、この自明の順序を実現するのに延々と時間がかかる。ホイジンガは、この謙譲ぶりが教会や宮廷での上席権をめぐる執拗な争いとおなじ心性にもとづく指摘する。万一にも謙遜に乗じて序列を踏みはずすと、相手の名誉はひどく傷つく。そうになると、文字どおり血をみる決闘と復讐の連鎖が生じて、事態は收拾不能になる。念いりな礼儀は身分的名誉感情の表現である。作法をたがえることは、当時のひと

(12) シュシェール『フランス中世の社会』(前掲) p. 436-437.

(13) ホイジンガ、堀越孝一訳『中世の秋』中央公論社、文庫版(上) p. 90. (Huizinga, 1919).

びとの特徴である激情と傲慢が爆発する引き金となる。

『少年礼儀作法論』

エリアスによると、16世紀のエラスムスの礼儀作法書では基調の変化が生じる。エラスムスが『少年礼儀作法論』で読者として意識しているのは、宮廷貴族の若者よりも、努力してその習慣を学ぶ必要のある地方貴族と上流市民の若者である。エラスムスはこの書物をささげたブルゴーニュ家のアンリ王子につぎのようにのべる。

「わたしが若いあなたに子供の礼儀について語ろうとするのは、あなたがこれらの作法を大いに必要としているからではありません。あなたは小さいときから廷臣たちのあいだで教育されてきたし、早くから優れた教育者を得られたのですから」/ 「高貴なひとびとは、自由な学習によって精神を鍛錬するすべてのひとびとのことと考えられるべきです。他のひとびとは盾形紋章に、ライオン、鷲、牛、豹などを描くことよろしい。自分の紋章に、自分が学芸に没頭して習得したすべてを描くこと⁽¹⁴⁾ができるひとびとのほうが、より多くのほんとうの高貴さをもっているのです」

『少年礼儀作法論』は「宮廷に出かけて、そこで上品なふるまいの真髄にふれるだけのチャンスも手づるもない」「若い」ひとびとを対象とした16世紀から18世紀⁽¹⁵⁾に書かれた多くの礼儀作法書のさきがけとなる。

エラスムスの礼儀作法書のもうひとつの特徴は、礼儀作法が相手の心理とのかかわりで論じられることである。礼儀はそれ自体が目的というより、相手に不快感をあたえぬための配慮にかわる。他者の礼儀に失した行為に接した場合にも、怒りにかられてかれをとがめるよりも寛容であるように助言される。

(14) エリアス『文明化の過程』上巻, p.176-177. Erasmus, *On Good Manners for Boys* (De civilitate morum puerilium, 1530), translated by Brian Mccregor, in *Collected Works of Erasms* 25, p. 273-274.

(15) エリアス『文明化の過程』(前掲)上巻, p. 230.

「他人の無作法を許してやりなさい。それが礼儀の最大的美徳である。……ふるまいが洗練されていないことを、別の美徳で償っているひとびともいるからである。」
 / 「仲間の誰かが心ならずも無作法なことをすれば、それをそのひとにだけ、しかも愛想よく言ってやりなさい。それが礼儀というものだ」⁽¹⁶⁾

ここにみられる寛容は、一面ではエラスムス個人の持ち味であろう。文芸復興がすでにはじまり、宗教改革がまだスタートをきらない時期ゆえの寛容でもあるだろう。しかし、エラスムスの礼儀作法論は、意見が多様になり、従来より「個人」が意識されるようになる、という、この時期から今日までつづく一般的傾向に対応したあたらしいタイプの社交術の誕生をもしめしている。

一般に、ある集団の内部で意見の分裂がふかまると、ひとびとは自己を表出したり、韜晦したり、あるいは、相手と調和したりするうえで、これまで以上に配慮と柔軟性が必要になる。また、他者と相互行為するとき、他者の身分があらわす自明の標識に注意するだけでたりず、他者が意識的に提供したり、あるいは、なにげなく提供する不確かな標識の連鎖から、他者の「個性」を解読することをせまられるようになる。これにともなって人間交際にあたたかな「技術」が生まれる。ひとびとは「自然な」態度をあらためて学習しなければならない。よそおった実直は巧緻な瞞着である。他者に気がねなく自己を表出させる腹藏のない態度（それゆえ、他者を観察し、その「真意」をさぐるうえでもっとも有効な態度）は「自然な」態度というより、むしろ訓練によってえられる人為の所産である。

エリアスによると、身分関係をドラマチックに表現することを主たる目的とした仰々しい礼儀は宮廷風の礼儀 (*courtoisie*) である。これにたいして市民風の礼儀 (*civilité*) は、自分のふるまいが相手にあたえる心理的影響に気く

(16) エリアス『文明化の過程』(前掲)、上巻、p.187. *Collected Works of Erasmus, op. cit.*, 25. p. 289.

ばりし、自己の願望を強制の印象をあたえずに実現するための技術である。⁽¹⁷⁾ エラスムスの礼儀作法書は宮廷風の礼儀の胎内に市民風の礼儀がやどりはじめたことの例証である。

宮廷社会の完成—ルイ14世の時代

わたしたちは先をいそぎすぎたかもしれない。エリアスが宮廷社会の頂点とみなすルイ14世の時代になっても宮廷風の礼儀は健在である。それどころか、宮廷礼法はこの時期にバロックの極端に達したかのようである。礼儀は依然として貴族の体面保持のシステムとむすびついている。この体面保持のしくみのもとでは、貴族の全生活様式が位階にもとづいて組織化される。大公(prince)は国王より小規模な宮殿(palais)をいとなむ。公爵(duc)は公爵にふさわしい壮麗な邸宅(hôtel)をいとなむ。侯爵(marquis)は公爵にはおよばないが、伯爵(comté)よりも立派な邸宅をいとなむ。広大な館に居住し、たくさんの使用人をかかえ、さまざまな階層の客人をもてなすには、多大の費用がかかる。しかし、体面を重視することこそ貴族の規範であり、経済性を重視することは平民の規範である。⁽¹⁸⁾ それゆえ、貴族は身分に応じた奢侈にあげくれ、破

(17) 「思うに礼儀の精神とは、我らの言葉づかいや立居振舞によって相手をし、我らにも自己にも満足させしめる、ある心づかいのことであろう」(ラ・ブリュイエール、関根秀雄訳『カラクテール—当世風俗史』岩波書店、p.189-190。(La Bruyère, 1687).

(18) エリアスは、リシュリュー公が大貴族にふさわしい金の使い方を学ばせるために息子にあたえた金の入った財布を、息子がそのままもちかえったとき、財布を窓からなげすてた逸話を紹介する。この貴族の規範の陰面であり、平民の規範のカリカチュアであるのは、アルパゴンが息子にあたえる説教であろう。

「ほくがどんなむだづかいをしてるんです」

「どんなだって。よくも訊けたものさ。そんな贅沢な着物をきて、町じゅうをほっつき歩き、恥ずかしいと思わんのか。……天罰を恐れるがいい。爪先から頭のてっぺんまで、おまえが身につけているものをひっくりめたら、有利な年金契約に投資するだけの資本がかかっているんだぞ。……まるでもう侯爵さま気どりじゃない

産への道を直進する。⁽¹⁹⁾

かれらが宮廷でおこなう奉仕もまた儀礼化されている。国王の肌着の着替えを手伝うことは王の親族と最上層の貴族にだけ許される荣誉であった。国王がベッドにいるうちに寝室にはいることの許される「大入室特権」をもつ最高位の貴族にはじまり、国王が肌着をかえるまでに入室できるものや、着替えを終えた後に入室を許されるものをへて、寝室を出た国王を整理してむかえることのみが許されるその他大勢の宮廷人まで、国王の朝の引見は入室特権(entrée)を基準に宮廷貴族を序列化する。着替えにかぎらず、さまざまな日常的・生理的些事が諸貴族の国王からの距離を象徴する儀礼として呪物化される。

フリードリッヒ大王はフランスの宮廷の作法を聞いて、この国にはふたりの国王(閑人のあいさつに応じる国王と実際に国を統治する国王)が要るとのべたという。ルイ14世の世紀、フランスの宮廷は儀礼にあげられていただけではなかった。ヴェルサイユはヨーロッパの政治の中心であり、最新の流行と文化の発信源であった。この社会で生きのびるためには、伝統を尊重するようにみ

か。そんな身なりをして歩くところを見ると、てっきりわしの金をくすねているにちがいない」(モリエール、鈴木力衛訳『守銭奴』『全集』第3巻、p.94、中央公論社、Molière, 1668).

(19) 「家柄身分に相応しい対面保つためとありや/贅沢ぶりをひけらかし 出費惜しん
 じゃなりませぬ/言うには及ばぬことながら住まうは豪華な大邸宅/下働きか中間か
 仕着の色で見分けさせ/どこへ行くにもぞろぞろと付き従える供奉の列

公爵様が侯爵か扈従の 顔ぶれ見りゃ分る/やがて文無し 貴族殿日々の糧にも事欠
 いて/金は借りるが返さない高等技術を身につけて/小心者の執達吏数でこようとへ
 いっちゃら/債権者など門前で日がな終日待ち呆け

したが到頭力尽き侯爵殿は牢屋入り/訴訟の重みに 堪えかねて 無残やお屋敷崩れ
 落つ/いかほど気位高くともそうなりや背に腹かえられず/平民風情と婚姻の盃かわ
 す情けなき/斯くも貴き^{うじすじょう}氏姓このようにして 金にかえ 卑しい契りを取りかわしご先
 祖様を売り渡す」(ボワロー、守屋駿二訳『諷刺詩』岩波書店、p.80-81. Boileau, 1666).

えながら流行に鋭敏であること、忠実をよそおいながら変転する政治状況に上手に対応することが不可欠であった。エリアスによると、「エゴイズムが人間行動の原動力であるという考え方が形成されたのは、ようやく有職市民的・資本主義的競争の場にいたってではなく、なによりもまず、宮廷での競争の場において⁽²⁰⁾であった」。

エリアスはこの時期に発達した宮廷人の対人関係技術を、人間観察術、人間取扱法、宮廷合理性（目的のための感情の抑制）の3点に整理する。

人間観察術。本人のいるところでは愛想よく応対し、本人のいないところでは痛烈な悪口をとばすのが機知のあらわれでさえある宮廷社会では、語られた言葉を額面通りにうけとるのは愚かである。宮廷人は他者の表情や身ぶりから、注意深く相手を値踏みし、その意図をさぐろうとする。ラ・ロシュフコーやラ・ブリュイエールによる宮廷の偽善の批判はそれ自体が宮廷人の人間観察術の所産である。宮廷人にとってかれらの著作はサロンの話題であり、宮廷心理学のサブ・テキストである。この意味で、モラリストの文学は宮廷生活と対立するというより、隠微な共生関係にあるといえるだろう。宮廷の人間観察術はフランスの心理小説の起源ともなった。

人間取扱法。対面的場面で他者を観察することは、結果的に、自分が他者から観察されていることを意識させる。多くのひとびとがよりつどう社交空間は万人が万人を観察する相互観察のシステムである。ひとびとがこの空間で自分の願望を成就するためには、いりくんだ他者の視線を意識しながら演技をつづけなければならない。宮廷人のつきあいは生涯にわたってつづく。目的を達成するためには相手を出しぬく必要があるが、そのことによって自分の評価を落とすことは禁物である。位階において下位に位置するものはとりわけ慎重でなければならない。話題の選択権は上位者の側にある。目上の者の関心をそれと

(20) エリアス「宮廷社会」p.166.

なく自分の関与する問題にひきよせ、相手の機嫌を損じずに有利な立場をきずくためには、手練手管を要する。率直にふるまうことは有益だが、本当に率直であることが最良の戦術であることはめったにあるまい。エリアスのいう人間取扱法とはこのような対人関係操作の技術である。

宮廷合理性。人間の観察とその操作を冷徹におこなうために大切なことは感情にかられたふるまいをさけることである。エリアスによれば、合理性にはさまざまな類型があるが、それに共通する特性は一定の目的を達成するために情感を抑制することである。エリアスの特徴づけたルイ14世時代の貴族の感情構造とホイジンガが叙述した中世の貴族がしめす激情とのあいだには距離がある。ルイ14世時代の宮廷合理性は、名誉感情の純粋な発露というよりも、国王以外は暴力を禁じ手とされた宮廷というゲームの世界で威信と権力の最大化をめざす合理性である。たしかに、それは経済的利益の最大化をめざすブルジョワの合理性ではない。経済的基準に照らすと、宮廷合理性は不合理であろう。しかし、市民社会は宮廷社会から、みがきあげられた人間観察術と人間取扱法、情感を抑制するという合理性のエッセンスをうけついだ。

エリアスの議論は宮廷文明の頂点であるルイ14世の時代で基本的に終了する。わたしたちはもうすこし欲ばって貴族からブルジョワへの覇権交代の時期にまで議論を進めることにしよう。

2 貴族とブルジョワ

貴族文化の衰退

ルイ14世の時代だけをみても、宮廷礼法をささえる貴族の心性は変化しつつあった。ベニシュールによると、愛よりは名誉を、恥辱よりは死をえらぶコルネーユ風の封建貴族のモラルは、フロンドの乱の後、凋落した。⁽²¹⁾宮廷合理性は、

(21) ベニシュール、朝倉剛・羽賀賢二訳『偉大な世紀のモラルーフランス古典文学における英雄的世界像とその衰退』法政大学出版 (Bénichoi, 1948).

王権に対抗する軍事力を喪失し、国王の寵をもとめるしか生きる術のない貴族の適応の所産でもある。また、アザールによると、1680年から1715年までの時期は、ピエール・ベールやイギリスのロックたちによって、敬虔な信仰・王権の神聖・諸身分を自明のものとしてうけいれる伝統的精神にかわって理性と自然法の観念にもとづく批判精神が台頭する時期だが、これはルイ14世の治世の後半に対応する。⁽²²⁾

ルイ14世没後の摂政時代になると、変化は目にみえるようになる。ルイ14世の絶大な権威のもとでヴェルサイユに一極集中していた観のある宮廷社会は大貴族のサロンに拡散する。貴族社会の趣味はバロックからロココに変化する。ゴンクール兄弟が発掘した当時の⁽²³⁾言葉によると、女性美の規範は「毒蛇に胸を噛ませる」クレオパトラの悲壮美から「アエネアスのヴィーナス」の官能美に移行する。

ウェーバーによると、合理化の進展は文化の諸領域の固有の価値を解きはなつ。このとき、審美性を固有の価値とする芸術の領域は「ますます重みを増してくる理論的・実践的合理主義」への対抗者にしたてられる。⁽²⁴⁾18世紀の貴族の趣味が「感覚への関心」にむけられ、心地よくはあるが空虚な印象をあたえるものになった理由のひとつは、対抗勢力であるブルジョワがその時代の「理性」の唱道者になったことであろう。趣味の良し悪しという美的基準にもとづく言説は、その社会においてもっとも洗練されてはいるが、目的合理性基準でも価値合理性基準でも手づまりにおちいった社会階層（つまり下降期に入った

(22) アザール、野沢協訳『ヨーロッパ精神の危機—1680-1715』法政大学出版局、1973年 (Hazard, 1935).

(23) エドモンド・ド・ゴンクール、ジュール・ド・ゴンクール、鈴木豊訳『18世紀の女性』平凡社、p. 289 (Edmond et Jules Goncourt, 1862).

(24) マックス・ウェーバー、中村貞二訳「宗教的現拒否の段階と方向の理論」(『ウェーバー宗教・社会論集』所収) 河出書房新社。

支配層)が好んで採用する卓越化の手段のひとつなのだから。⁽²⁵⁾

多くの歴史家が指摘するように、18世紀の貴族は排他的になり、平民が貴族の地位をえる機会をできるかぎり抑制した。とはいえ、理性の看板を平民にうばわれ、閉鎖的になったとはいえ、貴族の行動が以前より「非合理」になったとはいえない。18世紀の社交界をえがいたラクロの『危険な関係』にみられる当時の恋愛風俗は、計算のいきとどいた知的遊戯であり、「合理性」の基準を十分にみたしている。しかし、この「恋のマキャベリズム」は、相手を破滅においこむ快感を味わうこと以外、ほとんど無目的である。高度に洗練されてはいるが、名誉観念も情念の奔騰もみられなくなった18世紀の社交界は貴族社会固有の価値の空洞化をしめしている。

「ルイ14世紀の時代は、宮廷のほうが都市よりもしっかりとした判断力をそなえていたが、今では都市のほうが宮廷よりしっかりとした判断力をもっている。両者の意見が一致することはめったにないが、それは驚くにあたらない。それは受けた教育が正反対ではないにしても、あまりに違いすぎるからである。……今では、良識のほうが、かつてのへつらいの心以上の説得力があるのだ。都市はすべてのことについて、しかもよどみなく語る。……都市にはすべての技芸、あらゆる光明が集まり、それが混じりあって、さらにいっそう大きな力となっているので、大胆に判断を下すが、それは自分の力を自覚しているからであり、また多くの試練を経てきた自分の才覚に一掃の確信があるためである。それらにひきかえ宮廷は、自分の意見を確認するのに適した材料が、いろいろ不足していると漠然と考えている。……そんなわけで、宮廷は、美術、文学についてはおろか、今でも彼らの管轄に属している一切のことに関してすら、かつて持っていた影響力を失ってしまったのだ。⁽²⁶⁾

模倣するブルジョワ

前節の最後に、フランス革命直前のブルジョワジーが貴族階級から文化的へ

(25) 卓越化 (distinction) の概念については、ピエール・ブルデュー、石井洋一郎訳『ディスタクシオン』藤原書店を参照のこと (Bourdieu, 1979).

(26) メルシエ、原宏編訳『十八世紀パリ生活史—タブロー・ド・パリ』、岩波書店、上巻、p.174-175. (Mercier, 1782-88).

ゲモニーを奪取した勝利宣言とでもいえる文章を引用した。しかし、このようなブルジョワジーの自負が生じる以前、かれらの上昇移動の目標は貴族社会に接近し、その文化を模倣することであった。

ルイ14世の時代にもどろう。この時期、生まれながらの貴族の物腰とブルジョワの物腰とのあいだには、はっきりとわかる差があったようである。モリエールの喜劇のおかしさの大半は、ブルジョワが貴族のスタイルと自分のスタイルとの距離をどのように設定するかにかかわっている。『町人貴族』のジュールダン氏や『才女気どり』の娘たちのように貴族を猿まねすることは滑稽である。『亭主学校』のスガナレルや『女房学校』のアルノルフのように貴族のスタイルに反発し、昔の町人流に固執することは依怙地である。前者は笑いものにされ、後者は恋にやぶれるさだめである。

富裕なブルジョワは領地・官職の買とりや婚姻によって貴族の地位をえることができた。しかし、ブルジョワと貴族との婚姻は家族・親族という稠密な人間関係に文化摩擦を生みだす。ジョルジュ・ダンダン⁽²⁷⁾は金持ちの農民であってブルジョワではないが、おかれた状況はおなじである。

「貴族のやつらが縁組みするお目あては、財産だけで、おれたち人間なんか、どうだってかまやしないんだ。だから、いくらおれが金持ちだからって、あんな貴族の娘と結婚するんじゃない。気だてのいい、根っからの百姓娘と夫婦になったほうが、ずっとましだったんだ。うちの女房ときたら、亭主のおれを見くびって、おれの苗字を名乗るのがいやだ、なんてぬかすんだからな。そればかりじゃない。あいつの亭主にさせていただくには、おれの財産を全部はたいたってまだ足りない、などとうぬぼれていやがるんだ。……いまじゃ、自分の家にいてさえ、おっかなびっくり。帰れば、きつとなにかしら、いやな目にあわされるんだから」⁽²⁷⁾

ブルジョワが対抗文化を提示せず、社交界で貴族の設定した文化の次元でき

(27) モリエール、鈴木力衛訳「ジョルジュ・ダンダン」『全集』第3巻、p.9-10、中央公論社 (Molière, 1668).

そいあうかぎり、18世紀になっても上の状況はさほどかわらない。

「軽蔑はつねに貴族の傲慢さを装って現われるわけではない。徴税請負人の娘と結婚した大部分の名門の男たちは、あまり相手を侮辱する形式には縛られなかった。しかし社交界に紹介され、取柄といえただ控えめなだけで、身分違いと見下げられた哀れな女性は、嫌みたっぷりの冗談や、夫の耳許でさきやかれる嘲弄に耐えねばならず、夫の方ではその嘲弄をまたむし返して妻に聞かせて悦に入る⁽²⁸⁾」

とはいえ、屈辱をしのんでも貴族に接近することが、貴族を模倣するブルジョワの文化目標である。すでにのべたように、18世紀の社交界は宮廷から貴族の邸宅でのサロンにひろがった。大ブルジョワのサロンがこれにつづく。本来、主人がいきさいの費用を負担して客人をもてなすサロンは主人の客人にたいする優越を誇示する性質をもつ。しかし、ブルジョワが自宅に貴族をむかえる場合、⁽²⁹⁾ 恩義をうけるのはブルジョワである。裕福なブルジョワは自分のサロンに貴族をまねくために費用をおしまない。もし大ブルジョワのサロンが貴族のサロンにくらべて才気において欠けるなら、豪華な食事⁽³⁰⁾で貴顕のひとびとをひきつけることになるだろう。

(28) ゴンクール兄弟『18世紀の女性』(前掲) p. 222.

(29) 「あれほどの身分の方がこのうちへしよっちゃうおいでになって、わしを対等の者のように扱って、親友と呼んでくださるんだ。わしにとってこれほど名誉なことはないじゃないか……」

「……でもあなたのお金を借りて行くじゃありませんか」(モリエール、鈴木力衛訳『町人貴族』『全集』第3巻, p. 234-235, Molière, 1669).

(30) 「あの男は徴税請負人ですよ。生まれはだれよりも卑しいのですが、それだけ財産ではだれにまさっています。あいつはけっして自宅では食事をしないという決心さえつけば、バリ随一の顔ぶれを食卓に集めることもできるでしょう。ご覧のとおり、あいつはたいへんぶしつけな男ですが、おかかえの料理人によって人に抜きんでてています。ですから料理人の恩を忘れてはおりません。なぜかと申しますと、きょう一日中あいつが自分の料理人をほめあげていたのをお聞きになったでしょう」(モンテスキュー、井田進也訳『ペルシャ人の手紙』『世界の名著 34』p. 128,

社交の形式だけなら、模倣はさらに容易である。18世紀末には下層のブルジョワにもサロンの習俗が浸透する。

「三流クラスのブルジョワは、大ブルジョワをまねて、今では何日か日を決めてサロンを開こうと考えるようになった。トランプ遊びなどをするそういう集まり(cercle)の支えともなり、盾ともなっているのは、老女と老嬢である。……太った未亡人や、時代おくれ老嬢たちや、教区の主婦などがみないっせいにしゃべっている。そこは、他の場所で支配的な思想とはまったく違った思想が支配しており、半世紀も昔に後戻りしたかのような気分になる⁽³¹⁾」

たしかに本物の社交界とちがって、この光景は陰鬱でさえある。しかし、後述するように、サロンのソシアビリテが下層のブルジョワにまで浸透し、サロンにあつまる主人と客人との社会的距離が減少することは、19世紀のブルジョワの典型的なソシアビリテである——参加者が費用を平等に分担する——セルクル(cercle)の成立の歴史的前提条件でもある。

貴族に伍するブルジョワ

財産にたよって社交界できそいあうよりも、国家や都市の官職を買いとって貴族になるほうがブルジョワの本領を発揮しやすい。ルイ14世の時代、国家行政の実務の領域は平民出身者によって占拠された。行政官は官職に応じて一代

中央公論社, Montesquieu, 1721).

「料理人たちのほうが系図書きをうち負かした。公爵たちは宴会から出てくるが早いから、自分たちにご馳走してくれた主人公を嘲弄したけれども、それでもご馳走につられてやってきた。……そういうわけで、われわれはどんな初歩の料理法の本をとってみても、そこに列挙されたご馳走の中には必ず金融家風 à la financière と銘うった料理が一つや二つはあるのである。また昔 800フランもした走りのグリーンピースを召しあがったのも、王様ではなくて徴税請負人であった」(ブリア-サヴァラン, 関根秀雄・戸部松実訳『美味礼賛』岩波文庫, 上巻, p. 214-215, Brillatë-Savarin, 1826).

(31) メルシエ『十八世紀パリ生活史』(前掲)上巻, p. 179.

かぎり、三代かぎり、あるいは永代の貴族に叙された。行政貴族は実務にたずさわるので、かれらを軽侮する帯剣貴族とちがってブルジョワの勤勉さを要求される。かれらの頂点にある法服貴族の息子たちも司法官の職を維持しようとするれば、法学士の学位をとり、弁護士資格をえる必要がある。そのかぎりで、かれらも帯剣貴族と対照的なガリ勉気質を身につけざるをえないのである。

「馬車の中でぼんやりしているなんて、多分そこであらうとなさるなんて冗談ちゃありませんよ。さあ早く御本を、あるいは書類を、出してお読みなさいよ。御供まはり仰々しく行きすぎる人たちにも、ろくすっぽ挨拶もなさらんがよい。そうしたらかれらも、あなたは多忙だなと思うでしょう。そして言うでしょう。《あの男は勉強家だ。精力絶倫だ。町中でも、途中でさえ、ああして読んでいる。勉強している》と。よろしく下っ端の弁護士にお学びなさい。いかにも事務に忙殺されているように、見せなければいけないのです」⁽³²⁾

売官制度の是非をめぐる議論は当時からやかましかった。ルイ14世の時代、名門貴族の大半は成り上がり貴族をつくるこの制度をきらった。しかし、18世紀になると、奢侈にかんする蜜蜂の寓話のように、直観的には悪徳とみなされる社会現象を「機能主義的」に弁護する言説があらわれる。エリアスによると、モンテスキューは売官制度と貴族に商業活動を禁じる当時の法令とを弁護するため、エリートの周流にかんする最初の社会学的モデルを提出した。モンテスキューによると、人民に祖国と平等とにたいする愛を期待できない君主制では、ひとびとが公務に従事する誘因は、かれらがそのことによって特別待遇をうけ、敬意をはらわれるという名誉感情である。君主制のもとでの売官制度は地位をもとめる平民の勤勉を鼓吹する効果をもつ。かれらの目標は金をため、法服貴族の官職を買いとることである。ところで、法服貴族は国家のために仕事にはげむ尊敬に値する職業だが、栄誉の点では大貴族におとる。大貴族は栄光につつまれているが、公務にも経済活動にも従事しない無為な存在であ

(32) ラ・ブリュイエール『カラクテール』(前掲)上巻, p. 264.

り、法外な贅沢によっていずれは没落する。つまり、売官制度と貴族の商業活動の禁止は平民→法服貴族→大貴族→平民という社会移動のサイクルをつくりだし、身分制社会における人と富との再配分を促進する。⁽³³⁾

フランス革命が近づくと、モンテスキューの考えたモデルは経験的に妥当しなくなる。このモデルがなりたつ前提は平民が貴族になることを名誉とする価値観をもっていることだろう。実際には、平民は経済活動ばかりでなく公務の経験も積むことによって、あるがままの自分を自負するようになる。「自分が平民であること、もしくはそれとほとんど同義語だが、祖国にとって有用であること」⁽³⁴⁾が意識されるようになると、名門貴族も田舎貴族も、免税特権をもつ閑人とか、公務からもしりぞいた社会のごくつぶしという以上の評価をえることはむづかしい。貴族の特権はもはや渴仰の対象ではなく否定の対象である。「公的職務は、現状ではよく知られている4つの名称に分類できる。すなわち、剣、法服、教会、行政。これらの職務のうちほとんど20分の19までを第三身分が占めている」と、シェースが論じる時期は間近い。半世紀前なら、ここで公的職務にあげられたのは、剣、法服、教会の3つであつたらう。⁽³⁵⁾行政官吏の格上げはこの分野で腕をふるうブルジョワジーの自信の向上を物語る。

カフェーブルジョワのソシアビリテ

ある社会集団や社会階級を特徴づける対人関係の類型をソシアビリテとよぼ⁽³⁶⁾う。これまでにのべたことからあきらかなように、貴族のソシアビリテは、エリアスの指摘した宮廷合理性以外に、行為者がたがいの身分関係を意識して相

(33) モンテスキュー「法の世界」5編19章、20編22章を参照のこと。

(34) メルシエ『十八世紀パリ生活史』(前掲)上巻、p.173.

(35) たとえば、「フランスには3種の身分がある。教会と剣と法服。それぞれの身分が他の二者にたいして無上の軽侮を抱いている」モンテスキュー、「ペルシャ人の手紙」(前掲)p.121.

(36) 脚注(6)参照。

互行為をおこなう点にも特徴がある。ブルジョワジーの台頭は、このような宮廷とサロンのソシアビリテにかわる平等主義的ソシアビリテを社会の前面におしだす。ブルジョワのソシアビリテは、対人関係の平等性を強調する点で貴族のソシアビリテと区別される一方、相手との関係の円滑化をつねに意識している点や、いたずらに自己の感情を爆発させない点で宮廷合理性を継承し、民衆のシャリヅァリの「非合理性」と区別される。

このようなブルジョワ的ソシアビリテの典型はやはりカフェのそれであろう。アギュロンは、ミシュレが『フランス史』で、17世紀から18世紀への移行を「ワインからコーヒー、居酒屋からカフェ、粗野から精神」と要約し、「この時期を特徴づけるおしゃべりの奔騰、通行人、見知らぬ人、カフェに集まった人がすぐに談話をはじめこの過剰なソシアビリテ」とのべていることに注目する。⁽³⁷⁾ミシュレの指摘は、本稿がこれまでに論じてきた貴族文化からブルジョワ文化の分離とは逆に、民衆文化からブルジョワ文化が分離する側面をもたらす。カフェのソシアビリテは民衆のつどう喧騒にみちた居酒屋と上流階級の社交場であるサロンとの中間に位置する。たしかにサロンでも政治や文学について論議し、最新の情報を入手することができる。しかし、それは私邸でおこなわれることから、主人の好みで論議を支配し、客人は選別される。これにたいして、店に新聞・雑誌を置いて自由に客に読ませるカフェは、社交界に縁のない人間や金のない人間にとって安あがりの情報源であり、気のおけない議論の場である。

レチフの言葉を信用するなら、パリに最初のカフェができたのは、1705年のことである。⁽³⁸⁾メルシエによると、フランス革命の直前のパリにはカフェが600

(37) Agulhon, Maurice, 1977, *Le Cercle dans la France bourgeoise 1810-1848; Etude D'une mutation de sociabilité*, Paris: A. Colin, 1977. p. 9.

(38) レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ、植田祐次編訳『パリの夜』岩波書店、p. 71. (Rétif, 1788-94).

～700軒を数えられる⁽³⁹⁾。レチフとメルシエが一致して指摘するのはこの80年間にカフェの客層が低下したことである。当初、それは目新しい風俗で中流以上の貴族もおとずれたが、18世紀後半になると、「カフェに入り浸ること」は「上流の社交界とのつきあいがまったくない」ことを意味する⁽⁴⁰⁾。しかし、当時の第一級の知識人があつまった有名なカフェの議論の水準はサロンのそれにおとるものではなかった。ルソーが1740年代に通った《モジの家》やディドロが1760年代に通ったカフェ・ド・ラ・レジャンスでは将棋もずいぶんさかんだったようである⁽⁴¹⁾。カフェにいりびたるといふより、このふたりのようにカフェとサロンを行き来するのが当時の平均的ブルジョワ知識人の生活様式であった。

セルクルブルジョワのソシアビリテの到達点

フランス革命がはじまるとカフェは集合的興奮のつぼになる。

〔1780年6月9日〕パレ・ロワイヤルのコーヒー・ハウスはなおさら独特で驚くべき光景を呈している。店の中が客で満員なばかりでなく、あふれた連中が入り口や窓のところにおいて、椅子やテーブルの上に乗って、それぞれ少人数の聴衆相手に一席ぶっている二、三の演説者の言うことに耳をすまして聞きいっている。演説に聞きいる熱意、現政府にあびせる度のすぎた大胆で激しい表現のすべてに賛意をあらわす喝采のとどろき、そういうことは容易に想像できない。政府が蜂起や反乱のこのような巢と温床を許しておくのはあいた口がふさがらない⁽⁴²⁾]

フランス革命はクラブとよばれる革命結社を続々とつくりだした。イギリスから直輸入されたこの呼び名と組織形態はそれまでのパリにはみかけないもの

(39) メルシエ『十八世紀パリ生活史』(前掲)下巻, p. 45.

(40) メルシエ『十八世紀パリ生活史』(前掲)下巻, p. 47.

(41) ルソー, 桑原武夫『告白録』岩波書店, 中巻, p. 27/ディドロ, 本田喜代治・平岡昇訳『ラモーの甥』岩波書店の冒頭。

(42) アーサー・ヤング, 宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局, p. 171. (Arthur Young, 1794).

だった。しかし、アギュロンはこのようなクラブの多くが週1〜2回、自治区の購入した新聞を読みにあつまるブルジョワ集団であったことを指摘する。⁽⁴³⁾ クラブもまたカフェと同様に私的住居から独立した公共空間（たとえば接収された修道院）を会合の場とし、少額の会費をはらえばだれでも参加できる組織である。革命期の気分の昂揚を別にすると、多くのクラブの存在理由は平時のカフェと大差はなかった。

19世紀、王政復古の時代になると、クラブという言葉は革命時の記憶から忌避されるようになる。かわって定着する言葉はセルクルである。18世紀にはサロンの客人集団をさす言葉であったセルクルが、イギリスのクラブと同様の平等主義的ソシアビリテの呼称として定着する。⁽⁴⁴⁾ この時期のブルジョワのソシアビリテについては筆者はすでに論じたことがある。⁽⁴⁵⁾ 「優雅な生活にあってはもはや上下の別はない。ここではだれもが対等である」と、バルザックがのべたのは、カフェやセルクルを通じて、ブルジョワのソシアビリテが部分的には民衆社会にまで浸透したこの時期にはかならない。

とはいえ、ブルジョワジーによる民衆への文明の伝播の過程はここでのべた平坦な「浸透」の側面と同時に、はげしい闘争の側面もふくんでいることに注意したい。紙面の関係上、これについて論じることは別の機会にゆずるしかあるまい。

(43) Agulhon, 1977, *op. cit.*, p. 21.

(44) たとえばメルシエのつぎの文章。「教育があり、愛想のよい人々が集まるカフェは、自由で陽気な点で、時に退屈な我々のどのセルクルよりもました」（メルシエ『十八世紀パリ生活史』（前掲）下巻， p. 47. ここでもちいられているセルクルという言葉はサロンの社交集団をさしている。（脚注(31)を付した引用文も同様である）。

(45) 沢田善太郎，1989，（前掲）。

(46) バルザック，山田登世子訳『風俗のパトロジー』新評論， p. 58. (Balzac, 1830).

The Civilising Process: The Noblesse and the Bourgeoisie

Zentaro Sawada

This essay treats civilizing processes of the noblesse and the bourgeoisie in France. In the first half of this essay, we view the history of the social attitudes of the Middle Ages and early modern court nobles in France. The latter half of this essay pays attention on the age of late 17th century and 18th century, when the cultural hegemony switched over from the noblesse to the bourgeoisie. We will distinguish two types of the sociability: salon for the noble men and circle for the bourgeoisie.